

「2017年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学文学部2年生 近藤悠人

①学習成果

今回のプログラムに参加し、留学を通じて留学先の国・地域の文化的、社会的、経済的背景に対する深い知見を得ることができることを実感し、アジア地域とともにその他の地域への海外留学にも積極的に参加したいと思うようになりました。現時点では、次の留学は特に予定していないものの、視野を広げる格好の機会として留学を捉え、機会を見つけて再度積極的に参加しようと思っています。今回の留学を通じて、留学先国・地域を主体的に受容しようとする寛容と挑戦の精神が当該国・地域の多面的な理解に対して強く寄与することも学びました。またタイを特徴づける上座部仏教(テーラワーダ仏教)や熱帯気候、タイ語などをより一層理解することができ、主に仏教学や地理学、言語学に対する研究意欲が更に深まり、大学での学習に対する意識向上にも繋がったと感じています。

②海外での経験

現地の学生との交流を通じて、日本の学生とは異なるタイの学生の価値観に直接触れることができ、非常に有益に感じられました。具体的には、彼らが自国の政治状況や経済状況などに高い関心を持ち、学業や将来の就職に対して具体的な展望や意志を抱き、向上心を大切にしている点が最も印象に残りました。彼らのこの積極的な姿勢を見習い、残り僅かな大学生生活を有効的に過ごさなければいけないとも感じました。また講義終了後や自由行動の時間には、彼らと共にバンコク周辺の商業施設や観光施設、宗教施設、飲食施設、交通施設を巡り、率直な意見を交わしつつ日本社会とタイ社会の類似点や相違点について多面的な理解を深め、タイ社会の特色に目を向けることができました。特に王室や仏教の存在感が日本以上に大きいことや、都市化の速度と比較してバンコク市内の交通状況の改善が依然として進展していないこと、国民間の経済的立場が政治的立場に直接反映していることなどは、実際に現地の事情に精通している学生と行動を共にすることがなければ実感できなかったことでした。この貴重な経験を通じて、研究であれビジネスであれ、その対象領域のヒト・モノ・カネに直接触れ、五感を通じた理解に努めることが重要だと改めて認識しました。

③プログラム内容

日本語・英語・タイ語を用いてタイの文化や歴史、料理、言語に関する講座を受講し、タイについての包括的な理解ができました。それらの講座のうち、比較的長い時間が割かれたタイ語の講座では現地生活で必要となる単語や文法などの習得ができ、留学先の学生を含めたタイの人々との意思疎通が可能になったことに加えて、日本語や英語の見方とは異なったタイ語独特の見方にも触れることができましたため、非常に有益に感じられました。また日本文化を学習する講義での共同発表に向けて日本語学科に在籍する学生数名との主体的な調査・準備・意見交換を通じて日本・タイ両国の文化的交流を深め、社会的、経済的背景の類似点や相似点を浮き彫りにすることもでき、有意義に感じられました。それに加えてセクシャルマイノリティーが演じるショーやワット・ポー、アユタヤ遺跡等の実地見学も併せて実施され、講義では直接的には触れられなかったものの留学前から関心を抱いていた、タイ文化におけるジェンダー問題や上座部仏教の影響などの理解を図ることもでき、貴重な体験を得ることができました。一方で、2週間という短期間の留学であり、講義が日中の時間の殆どを占めていたため仕方のないこととは思うのですが、限られた時間の中で共同発表の準備などを行い、少しでも長くタイの実社会を体験・理解しようと努めた結果、時間的な制約や疲労感を感じることもありました。結果的に、余裕を持った時間管理や体調管理が大切な要素となった留学でした。

④進路への影響

今回の留学を通して、優秀な現地学生が抱えている学業や就職に対する意志や熱意、展望のほか、実社会の現状や課題に対する関心の高さにも直接触れ、学業や将来の職業など直接自分に関わるだけでなく、社会動静にも意識的にアンテナを張って、物事を広く深く考えて立体的に捉えていくことが大切だということに気付かされました。同時に、将来はアジア地域、特に発展著しいタイを中心とした東南アジア地域におけるビジネスに対してそれに相応しい責任と能力を持って積極的に携わりたいという思いもより一層大きくなりました。その前提として英語・タイ語学習を継続するとともに、当地域の文化的、社会的、経済的背景の研究も進めていきたいと思っています。

今回のプログラムと一緒に参加して頂いた京都大学・チュラーロンコーン大学両大学の先生方や学生の皆様を初めとして、留学実施のためご尽力頂いた全ての方々に深く感謝致します。

<事務局使用欄> 受付番号：

-